
些細な事。

鴨居 青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

些細な事。

【Nコード】

N4090Y

【作者名】

鴨居 青

【あらすじ】

些細な事。そこから恋が始まる。 竹原 遥23歳。 社会人になつて7ヶ月経ったけれどなかなか上手くいかない毎日。 同期の徳永と飲みに行った週末の夜、駅で課長と遭遇して

ホムペのブログでSSをたまーに書いてます。

本編の課長のイメージを損ねたくない方は閲覧を控えた方が宜しいかも知れません。

アルファポリスの恋愛小説大賞エントリーしてみています。

2月から投票受付だそうです。

ただ、投票する場合はアルファポリス未登録の方は登録が必要みたいなので、お手間をかけてしまう事請け合い！orzなんです…

きっかけは些細な事。 1

きっかけはほんの些細な事だった。

いつも怒ってばかりのあなたが、私を褒めてくれたから。

満面の笑顔で笑って「お前ならやれるって分かった」って言いながら頭を撫でてくれたから。

その後に「すまん、セクハラになるな」って慌てて謝ってきたのに、も何故か和んでしまったから。

そんな、些細な事。

「竹原あ！こつちに来い！」

「は、はいっ！」

今日も課長の怒鳴り声が営業企画部に響く。

周りの同僚たちは何時もの事と分かっているので特に気にもせず机に向かっている。

ただ一人、怒鳴られた本人である私を除いて。

「竹原、今度は何やったんだよ」

向かいの席にいる同期の徳永がパソコンの画面から視線を逸らさずに小さな声で私に尋ねてくるのだけど、私にも何故課長がご立腹なのか分からなかった。

「わ、分からないよー。」

そう言いながらも足は課長の席へと向かう。

席に近づくにつれて課長の怒気を含んだオーラが肌にびりびりと伝わってくる。

課長は殺気だけで人を殺せると思う。そんな事を言ったら課長に何言われるか分かったものじゃないけど。

課長の席に着くと課長は私を見て書類を差し出した。

「お前、これ見てみる」

そう言われて差し出された書類を受け取り、目を通してみる。

目を通して直ぐに何故呼ばれたのかが分かった。書類に記載された金額が明らかにおかしい。

「申し訳ありません！すぐ直します！」

「俺が目を通しておいたから良かったものの、取引先に見せてたら大変なことになっていたんだぞ。お前は注意散漫なんだよ。こういうミスが多い。気を付けろ」

課長はそう言いながら眼鏡を外すと目頭近くの鼻骨をつまむ様に揉んでいる。

ここの所課長は残業続きで疲れているようで、余計に申し訳なくなつてしまった。

「お手数おかけして申し訳ありませんでした」

「入社してからもう半年以上経つんだから、なんでそういうミスが出てくるのかきちんと考えろ」

課長は眼鏡をかけ直すと、他の書類に目を通し始めたので私は一礼して自分の席へと戻った。

この職場に就いてもう7ヶ月経つのにこんなミスをやらかしてしまう自分の駄目さにへこみながら、元のデータ呼び出していると

「竹原また入力ミスったの？」と向かいの席の徳永が話しかけてきた。

「うっ…それ以上は何も言わないで。今自分の駄目さ加減にへこんでいる所なんだから」

パソコンの画面に出てきたデータを見ながら間違っている金額の部分を直していく。

「へこむのもいいけど、今回は課長が先にミスを見つけてくれたんだからよし、と考えて次に繋げないと。いつまでへこんでいてもしょうがないだろ？」

「そうなんだけど…。」

徳永が言いたい事も分かる。取引先の人に目を通される前にこちら側で直ぐに気づいたのだから良かった。と考えると、入力ミスを繰り返さないようにすれば良いだけの事なのだ。

けれど、どうしても上手く気持ち切り替えることが出来なかった。

「…お前今日飲みに行くぞ、飲み」

「へ？飲み？」

突然の提案に一瞬びっくりして聞き返したのだけど、徳永は特に気にする様子も無く

「いつまでもうだうだ言っていないで気分転換でもして気持ち切り替える」

そんな事を言ってくる。徳永なりの気遣いらしく、それがとてもありがたかった。

私は茶化すように

「申し出はありがたいんだけど、私に用事があるかどうかも聞かないの？」

と言えば徳永も分かっているようで

「彼氏もない奴が週末どこにいくってんだよ。いつもの居酒屋でいいよな。」

なんて言ってくる。

「はいはい、そうですよー。仕事で手一杯ですから彼氏作る余裕なんてありませんし、っと出来た」

「お、出来たか。チェックは怠るなよ」

「今度は大丈夫。ちゃんと確認したから」

プリンターが修正したデータが印刷された紙を吐き出したので課長の元へと持って行く。

「よし、ちゃんと修正出来てるな」

「本当にお手数お掛けして申し訳ありませんでした」

「今後もチェックを怠るなよ。ああそうだ竹原、お前今度の水曜の夜空けておけよ。勝田部長への接待があるからな。」

「…勝田部長、ですか？」

私は思わず言い淀んでしまう。この勝田部長にはあまり良い思い出が無い。

勝田部長の元へ仕事の打ち合わせで行くといつもセクハラまがいの

事を言われたからだ。

それも会う度に言葉が酷いものになっていつている。

その事は徳永以外誰も知らない。言える訳が無かった。

「なんだ、勝田部長と飲むのが嫌なのか？」

訝しげに見てくる課長に私は慌てて首を横に振り

「いいえ、違います！つい先日お会いした時にはそういう話をされなかつたので」

びっくりしちゃって、と笑いながら言うのと課長は納得してくれたよ
うで

「ああ、ついさっき電話で話しててそういう流れになったからな」

「分かりました。水曜の夜は空けておきます」

そう言つてぼろが出ない内にそそくさと自分の席へと戻った。

折角徳永が気を使つてくれて浮きかけていた私の心は簡単に地の底
へと落ちた。

「何、あの勝田部長と飲むの？」

そう言いながら徳永は枝豆を鞘から押し出している。

「そうなんだよー。徳永あ、私どうしたらいいんだろー」

私はテーブルの上に顎を乗せて下唇を突き出していると、鞘から出
した枝豆を徳永が私の目の前に差し出すので、口を開けると枝豆が
放り込まれた。

「俺も一緒に行けたらいいんだけど、全然関係無いからなあ」

「そう言つてもらえるだけでも嬉しいよ。ありがとう。ってかなん
かいつも気を使わせちゃってごめんね」

徳永はいつも何かとフォローしてくれる。それが今はとてもありが
たい。

「徳永に迷惑かけない様に頑張らなきゃなあ」

ビールジョッキをぐいとあおる。今日もビールが美味しい。

ごくごくと喉を鳴らしてビールを一気に飲み干す。

「ぷはあ、んーんまいっ！あ、私生中頼むけど…って徳永？」

徳永のジョッキが空だったので注文するのか聞こうと思ったのだけ

ど、徳永は何かを考え込むように空になったジヨツキを握り締めている。

「おーい。徳永？」

私が覗き込むように徳永を見れば、徳永は私を見つめてきた。

「俺、迷惑とか思っただけから。」

「え？」

「別にお前は仕事が出来ないわけじゃない。凡ミスは多いけど。そもそもミスが多いのも色々やり過ぎるから出てきてるだろ。今回のだって他のものも幾つか並行してやってたから確認まであまり気が回らなくてミスに繋がったんじゃないのか？自分でなんでもかんでもしようとするからいけないんだ。もっと他の人を頼ってもいいんだよ。」

てつきりからかう様な言葉が返ってくると思っていた私は、徳永の真面目な言葉に驚いてしまった。

確かに、徳永の言うとおりかもしれない。頼まれた仕事を考えもせずに言われたから全部やらなきゃと思いついてた。

徳永って凄い。そう思いながら私がまじまじと徳永を見ていたので徳永は気恥ずかしいのかみるみる赤くなっていた。

「あーくそつ。こんなのガラじゃないんだよ！すいませーん生中2つ下さい！」

「やだ徳永かーわいいー」

いつものお返しとばかりに徳永をからかってやる。

「うっさい、可愛い言うな」

不貞腐れたように言う徳永が可笑しくて、思わず顔がにやける。

「にやにやすんなよ、気持ち悪いな」

「気持ち悪いって酷いなー。」

「気持ち悪いもんは気持ち悪いんだよ」

「何それ！まあいいですけどー。けど、徳永の言うとおりだわ。私、自分でなんでもこなせるようにならなきゃっていつつも思ってた。

自分のキャパシティ考えずになんでも引き受けちゃってた。入社し

て7ヶ月経つのに今そんな事に気づくなんてやっぱり駄目だなあ。」

「まあそれに気づけただけでも良かったんでないの？まあ気づかせ
てやったのは俺なんだけどな」

得意げに答える徳永にいたずら心が湧いてきた。

「徳永様にはホント感謝してます。ありがと」

ぺこりと頭を下げると徳永はまた照れたのか顔が赤くなっていた。

その後も週末ということもあり思いきり飲んだ。

終電近くに店を出る頃には私たちはすっかり出来上がっていた。

「気をつけて帰るんだぞ」

「はいはい。大丈夫だよー」

律儀に駅まで送ってくれた徳永に手を振って駅の改札を潜る。

あー結構飲んだなあ。なんて考えながらホームのベンチに座った。

11月の風はお酒で火照った体には丁度良い心地よさだ。目を瞑っ
て風に意識を集中させていると

「あれ？竹原？」

聞き覚えのある声があった。

目を開けると目の前に課長が立っていた。

きっかけは些細な事。 2

「何、あの勝田課長と飲むの？」

「そう言いながら徳永は枝豆を鞘から押し出し出している。」

「そうなんだよーう。徳永あ、私どうしたらいいんだろー」

私はテーブルの上に顎を乗せて下唇を突き出していると、鞘から出した枝豆を徳永が私の目の前に差し出すので、口を開けると枝豆が放り込まれた。

「俺も一緒に行けたらいいんだけど、全然関係無いからなあ」

「そう言ってもらえるだけでも嬉しいよ。ありがとう。ってかなんかいつも気を使わせちゃってごめんね」

徳永はいつも何かとフォローしてくれる。それが今はとてもありがたい。

「徳永に迷惑かけない様に頑張らなきゃなあ」

ビールジョッキをぐいっとあおる。今日もビールが美味しい。

ごくごくと喉を鳴らしてビールを一気に飲み干す。

「ぶはあ、んーんまいっ！あ、私生中頼むけど…って徳永？」

徳永のジョッキが空だったので注文するのか聞こうと思ったのだけど、徳永は何かを考え込むように空になったジョッキを握り締めている。

「おーい。徳永？」

私が覗き込むように徳永を見れば、徳永は私に視線を向けて

「俺、迷惑とか思ってないから。」と言った。

「え？」

「別にお前は仕事が出来ないわけじゃない。凡ミスは多いけど。そもそもミスが多いのも色々やり過ぎるから出てきてるだろ。今回のだって他のものも幾つか並行してやっていたから確認まであまり気が回らなくてミスに繋がったんじゃないのか？自分でなんでもかんでもしようとするからいけないんだ。もっと他の人を頼ってもいい

んだよ。」

てつきりからかう様な言葉が返ってくると思っていた私は、徳永の真面目な言葉に驚いてしまった。

確かに、徳永の言うとおりかもしれない。頼まれた仕事を考えもせず言われたから全部やらなきゃと思いついていた。

徳永って凄い。そう思いながら私がまじまじと徳永を見ていたら、徳永は気恥ずかしいのかみるみる赤くなっていった。

「あーくそつ。こんなのガラじゃないんだよ！すいませーん生中2つ下さい！」

誤魔化すように大声でオーダーを言う徳永。

「やだ徳永かーわいいー」

いつものお返しとばかりに徳永をからかってやると

「うっさい、可愛い言うな」なんて、不貞腐れたように言う徳永が可笑しくて、思わず顔がゆるんだ。

「にやにやすんなよ、気持ち悪いな」

「気持ち悪いって酷いなー。」

「気持ち悪いもんは気持ち悪いんだよ」

「何それ！まあいいですけどー。けど、徳永の言うとおりだわ。私、自分でなんでもこなせるようにならなきゃっていつつも思ってた。

自分のキャパシティ考えずになんでも引き受けちゃってた。入社して7ヶ月経つのに今そんな事に気づくなんてやっぱり駄目だなあ。」

「まあそれに気づけただけでも良かったんでないの？まあ気づかせてやったのは俺なんだけどな」

得意げに答える徳永にいたずら心が湧いた。

「徳永様にはホント感謝してます。ありがと」

ぺこりと頭を下げると徳永はまた照れたのかみるみる顔が赤くなつた。

その後も週末ということもあり思いきり飲んだ。

終電近くに店を出る頃には私たちはすっかり出来上がっていた。

「気をつけて帰るんだぞ」

「はいはい。大丈夫だよー」

律儀に駅まで送ってくれた徳永に手を振って駅の改札を潜った。

あー結構飲んだなあ。なんて考えながらホームのベンチに座る。

11月の風はお酒で火照った体には丁度良い心地よさだ。目を瞑って風に意識を集中させていると

「あれ？竹原？」

聞き覚えのある声があった。

目を開けると目の前に課長が立っていた。

きっかけは些細な事。 3

「お、お疲れ様です！」

びつくりして立ち上がると課長は苦笑しながら

「そんな畏まるな、会社の外なんだし。取り敢えず座れ」

と言って私の隣に腰掛けたので、私もつられて座った。

会社外で課長と遭遇するのは初めてで、私は酷く緊張した。

どうしよう。何を話したらいいのだろう。

「…今日も残業だったんですか？」

課長がここのところ残業続きなのは知っていたので、当たり前障りのない事から聞いてみた。

「まあな。ようやく一段落ついた所だ」

課長は背もたれに体を預けて天井を仰ぎ見るとふう、とため息を吐いた。

「竹原はなんでまだここにいるんだ？確か定時に帰っていたはずだよな」

そう問われてなんだか後ろめたさを感じた。

「う…申し訳ありません」

課長が残業で残っているのに自分は徳永と飲んでいたとはとても言えず、思わず謝ってしまった私を見て、課長は一瞬不思議そうな表情を浮かべたけれど直ぐにその理由に行き当たったようで

「俺の仕事が立て込んで残業してただけだ。お前は自分の仕事を終えて退社してるんだから気に病む必要はない」と言ってぽんぽんと軽くあやすように私の頭を撫でた。

課長に頭を撫でられるのは不思議と悪い気がしなかった。仕事中は何時もピリピリしていて近寄りがたいオーラを出しているのだけど、前に一度私に見せたこういう優しい所があるからどんなに怒鳴られても結局は憎めないんだよなあ。なんて考えていたら、課長は慌てて

「あっ、すまん。またやっちゃったな」

と言つて手を引つ込めた。課長は少し気まずそうだった。私が黙つてしまった事を何か勘違いしてしまったようだ。

頭を触られる事位平気なのに。申し訳なさそうにしている課長に和んでしまつて顔を緩ませながら

「いえ、気にしないで下さい。嫌じゃなかつたですから」

笑つてなんでもないと意思表示をした私を見て課長は安堵した表情になつた。

「ごめんな。そう言つて貰えると気が軽くなるよ」

気を付けないとなあ、と呟く課長の声に被せるようにスピーカーが最終電車の訪れを告げた。

「あ、電車が来ますよ課長」

電車が構内に滑りこんできたので立ち上がったのだけど、足に上手く力が入らずフラついてしまう。

「おいおい、大丈夫か？」

すかさず課長が立ち上がつて私の体を支えてくれたのでヨロけただけで済んだ。

課長から微かに甘い匂いが漂う。

「あ、す、すみません」

座っている内に酔いがピークに達していたようで体の動きが鈍い。

「…竹原、酒臭い。お前どんだけ飲んだんだよ」

ふう、と怒つた様にため息を吐く課長に手を引かれて電車へと乗り込んだ。

あれ、課長と手を繋いでいる。そう気づいた時にはもう課長は繋いだ手を解いていて、私と課長はベンチシートにその身を沈めていた。「竹原、いつもこんな飲み方してるのか？」

あ、まずいなあこの感じ。課長から何時もの怒気がひしひしと伝わってくる。

思わず居住まいを正してきつちりと座るけれど、恐くて課長の顔が見れない。

「申し訳ありません。週末って事もあつてつい…」

「ついじゃないだろうが！仮にも社会人なんだぞ。そもそも、社会人云々の前にお前は女なんだ。飲むのは構わないがそんなフラフラするまで飲むもんじゃない。何かあったらどうする」
声を抑えているけれど、語気の強い言葉。的確な正論に私はぐうの音も出ない。

会社外でまで課長に怒られるとは。情けないやらなんやらで自分が物凄く恥ずかしい人間に思えてきてなんだか泣きたくなった。

「それにこんな夜遅くまで飲むならタクシーを……」

課長は言葉が続けるけれど私はこれ以上聞くことが出来なかった。

仕事でも怒られてばかりで成長しない私を、課長は呆れているのかもしれない。

そう思ったら何故か胸が苦しくなってしまうて。

「……まあ気分転換に飲むのはいいが、あまり羽目を外さないようにな……って竹原？」

課長の驚いた声に顔を上げると、課長はオロオロと慌てていた。

ぱたり。何かがスカートに落ちてきた。

ぱたり、ぱたり。頬を伝う雫がスカートにまた落ちる。気づくと涙

がぼろぼろとこぼれ落ちていた。

きつかけは些細な事。 4

「あ…れ？」

「すまん竹原！きつく言い過ぎた」

課長に謝ってほしい訳じゃない。そうじゃないのに、涙を止めることが出来なくて。課長に謝られた事で更に自分が嫌になる。

「謝らないください課長。自分が、自分が情けなくて。会社の外でまで課長のお世話になりっぱなしな自分が、物凄く恥ずかしいんです」

思っていることを口にしてしまうと心は容易く折れてしまうもので、決壊したダムのように涙が止めどなく溢れてきた。

今までの課長に対する申し訳なさで心が一杯になる。

「そんな事気にするな。部下の教育も上司の仕事の一環だから」

そう宥めるように言いながら背中をさすってくれる課長の手が凄く優しくて。

それがまた堪らなく情けない気持ち煽る。

「だ、って、仕事でもっ、迷惑を、かけ、てっ」

「あーもう喋るな」

しゃくりあげて上手く話せない私の言葉を課長は遮った。

「あのなあ、竹原は気負いすぎだ。入社してまだ1年未満、迷惑かけてなんぼなんだよ。そんなの百も承知で仕事を教えてる。何のために俺がお前達の仕事のフォローしてると思ってるんだ。失敗したら次に生かせばいい。失敗は成功の元って言うだろう。」

「でもっ」

「本当に気にする必要はないって本人が言っているんだから、気にするな。これ以上何か反論しようとしたら次の会議でお前に集中砲火浴びせるぞ」

脳裏に会議中、課長に質問攻めにあったことが浮かぶ。また延々細かい質問をされるのも嫌なので思わず口を噤んだ。

ただど分かっている。これも課長なりの優しさだっけ事。ああ、凄いなあ課長は。そんな風に考えてくれていたんだ。そう思ったら、申し訳ないと言う思いと共にどうにかして課長の好意に応えたいと思った。

私なりに、出来ることを頑張ろう。なんでもかんでもやろうとせず、少しずつ少しずつ出来るようにしていこう。

へこたれている場合じゃない。徳永に言われたことも参考にしながら頑張るんだ。

そう決意して、鞆から取り出したハンカチで目元を拭いた私は、肩の力を抜いた。

すると、ずっと私の背中を優しく摩ってくれていた課長の雰囲気は柔らかくなったような気がして顔を上げると、課長の眼鏡の奥にある瞳は優しく私を見つめていて。私と視線が合うと笑いかけてくれた。

一度褒められた時に笑顔を見せてくれたけど、その時以外で課長の笑顔を見たことがなかったので、私はまじまじと課長の顔を見つめてしまった。

「な、なんだよ竹原。俺の顔に何か付いてるか？」

訝しんだ課長にそう問われて、私はつい

「いえ、課長の笑った顔って一回しか見たことなくてびっくりしちゃって」

と言うと課長は苦笑いを浮べた。

「まあ職場ではいつも小難しい顔してるみたいだしなあ。いつも眉間にシワが寄ってるって言われるよ」

「ああ確かに！いつもこう、眉間に一本皺が入ってますよね。」私が課長の真似をしてしかめっ面になり、眉間を両方の人差し指で押し上げて皺を作る動作をしたら、課長はぶつと吹き出した。

「竹原の小難しい顔は全然小難しくくないな」

「なんですかそれ、私の顔に緊張感が無いみたいない方やめて下さい」

可笑しそうに笑いを堪える課長に抗議の視線を向けると、課長は小さく息を吐いてまたあの優しい目になった。

「自分で自分を追い込むなよ。何かあったら俺に直ぐ相談しろ。その為の上司だ」

「はい…、ありがとうございます」

課長の言葉に、私の心が少しだけ軽くなった気がした。

不意に車内放送が私の降りる駅の名前を告げたので降りる準備を始めると、隣に座っている課長も降りる準備を始めた。

「あれ？課長、この近くに住んでるんですか？」

「なんだ、竹原もここで降りるのか？」

ガタガタと電車は揺れながら失速し、やがて静かに停車した。

私も課長も立ち上がって、駅の構内へと出て行く。

「まあ、ついでだから送ってやるよ」

「え、そんないいですよ。私のアパートすぐそこですし」

「もう夜も遅いから一人で歩かせるのは気が引けるんだよ」

「でも…」

「俺の気が済まないから大人しく申し出を受けろ」

そう強く言われたので私はその言葉に甘えることにした。

等間隔に置かれた街灯が行く先を示すように夜道を照らしている。

夜空を見上げると星が瞬いていて綺麗だった。

「冬になると夜空の星が良く見えていいですよねえ」

「そうだなあ」

なんて他愛もない会話をしながら歩く。今日は課長の事を少しだけ知ることが出来たような気がして少し嬉しいと思った。

考えてみると、課長の事を何も知らなかった。その状況は今もあまり変わらないけれど、同じ部署にいて新人歓迎会とかもあったのに、ちよつと社交辞令程度に話したきりで、後は仕事上での会話ばかりだった。

もつと前に色々話しかけてみればよかったと少し後悔した。

「あ、ここの角を曲がった公園の近くです」

「…え？公園の近く？」

課長の疑問系の問い返しに答えるように小走りに角を曲がって、直ぐに見える公園と、その斜め向かいにある自分のアパートを指差した。

「あれです。だから言ったじゃないですか、近いです」

そう言うてにつこりと笑いながら振り返って課長を見れば、なんだか気まずそうに立ち止まり、私と視線を合わせた。

「あー、竹原。もう一度聞きたいんだが、本当にあのアパートなんだな？」

「ええ、そうですよ？」

何故そんなことを聞くのだろうと不思議に思いながら課長を見てみると、課長はアパートを指差して苦笑しながらこう言った。

「あそこな、俺も住んでるんだわ」

「えっ？」

驚いてアパートと課長の指先を何回も見てみるのだけど、どう見ても課長が指差している先は私が住んでいるアパートで。

「はははっ、自分が住んでいる所と同じ方向に進むなあとは思っていたが、自分が住んでるアパートに部下を送り届ける事になるとは思わなかったなあ」

課長は可笑しそうにくつくつと笑っている。

「ふふっ、確かにそんな事思いもしませんよね。なんだか可笑しい話ですね」

この予想もしなかった偶然に私もつられて笑った。

結局、課長は7階に住んでいるとの事で、その下の6階に住んでいる私は最後の最後まで課長に見送られることになった。

「今まで遭遇しなかったのが不思議だなあ」

「ですよねえ。こんな凄い偶然もあるものなんですね」

そんな会話をしている内に私が降りるフロアにエレベーターが到着した。

「そつだ竹原、あまり人に同じアパートに住んでいることは言うな

よ？」

エレベーターを降りた私に、ドアが閉まらないようにボタンを押しながら課長は照れているような怒っているような不思議な表情でそう言った。

「ああ、そうですね。社員寮ならまだしも、普通のアパートで偶々上司と部下が同じ所に住んでるって変な憶測を呼びかねませんし」「まあ、そういうことだな」

おやすみ、と言って課長はボタンから指を離す。

「おやすみなさい、課長」

ぺこりと一礼して顔を上げる頃にはドアが閉まりだしたので、もう一度軽く会釈をして自分の部屋へと向かった。

課長と変な秘密を共有することになってしまったけれど、なんだか浮かれるような不思議な気持ちになった。

だけで、本当は迷惑だっと思ってるんだアあああ

「…お前、酒が入ると絡み好きの泣き上戸になるのかよ」

「違います！泣いてなんかいないんですからああああああわああああああああん」

「お、落ち着け、な？泣いてない！竹原は泣いていないって分かってるから！」

なんて案もあったのですが…、却下ですよ、そうですね。

流れ始める。 1

今日も何時もの満員電車で揺られて職場へ行く。一週間の始まり。人口密度の高い車内は身動きが取れなくて周りの人との密着度が高い。

あまり動くと周りの人達からひんしゆくを買いそうなので視線だけ動かして辺りを見回しても課長の姿はなかった。

駅の構内でも課長の姿が見えないかと探してみたのだけれど課長は何処にもいなかった。

まあ、乗る電車の時間が同じだったらとつくの昔に遭遇していたのだろうし。

そんな事をぼんやりと考えている内に、会社最寄りの駅の名前がアナウンスされたので私は臨戦態勢に入る。

電車のドアが開くと同時に出口に吸い込まれるように人の流れが出来るのでそこはそのまま身を任せて駅の構内へと歩を進めた。

一番注意しないといけないのは改札を抜けた後の北口と東口への分かれ道。ここで人が交差するように行き交うので上手く避けながら東口へと向かわないといけない。

東口を抜けると後は銘々の目的地へと人が散っていくので、ここでやっとほっと一息吐くことが出来る。

朝のラッシュは私にとっては戦場。

入社したての頃は、人の波を上手く避けられずに良く北口へと流されていったっけ。

駅を出て直ぐのコンビニはいつも混んでいるので会社近くのコンビニで何時も栄養補給用のゼリーを買う。ゼリーを飲み終わる頃には会社のビルに到着。今日も7階の営業企画部のブースへと向かう。これが何時もの朝の風景。

「おはようございます」

自分の席へと向かいながら挨拶をすると、窓際に背を向けて配置さ

れたデスクに向かった課長が書類から視線を外さずに「おはよう」とだけ返してくれた。

やっぱり課長は眉間に眉根を寄せて険しい顔をしている。その眉間には綺麗な一本皺。

それを見て昨日のやり取りを思い出し、少し口の端が上がってしまった。

「なに朝っぱらからニヤニヤしてんの竹原。気色悪いぞ」

既に出社していた徳永からツッコミを受ける。

「なんでもない」

首を左右に軽く振りながら取り繕うようにそう言ってみただけれど、徳永に見られていた事が少し恥ずかしくて素早く椅子に座った。思出し笑いを見られること程恥ずかしいものは無い。

月曜日はいつも調子が上がらない。週末の時間の流れと週が明けからの流れの違いに少し戸惑いを覚えるから。こればかりは何時まで経っても慣れなくて無理矢理自分を奮い立たせて仕事を片付けていく。

12時を10分位過ぎて仕事キリの良いところまで来たので私は社内食堂へと向かった。

今日は給料日前なので定食セットは購入せずに、安くてお腹も膨れるカツカレーにした。

空いている席を探してキョロキョロと辺りを見回していると徳永が手を振って合図してくれたので、徳永の向かいに座った。

「来るの遅かったな」

徳永はそう言うプレートに載ったカキフライを1つ丸々頬張った。

「あー、キリの良い所までやっておこうと思って。そしたら少し出るのが遅くなっちゃった」

いただきます、と両手を合わせて小さな声で呟いてから私はスプーンを手にした。

「ふーん。あ、この前はちゃんと家に真っ直ぐ帰れたか？微妙にフラフラしてたけど」

スプーンに山盛りになったカレーを頬張りながら私はどうしようか迷っていた。

課長は同じアパートに住んでいることは誰にも言うなって言っていたしなあ。だからと言って課長と遭遇したことを徳永に言うのはダメだろうか。

まあでも一緒のアパートに住んでいることを口止めされたただだから、その部分だけ話さなければ良いと思いき徳永に昨日の帰りの出来事を話した。

「で、励ましてもらったと？」

既に食べ終わった徳永は食後のお茶を飲んでた。

「そうなんだよね。もうホント自分が情けなかったよ」

私はしょぼくねながらフォークに持ち替えて豚カツを頬張った。

「やっぱりタクシーで帰らせた方がよかったな。しかし課長もまた面倒見がいいと言うかなんと言うか」

そう言って徳永は苦笑した。

「課長ってやっぱり凄いよねえ。皆の事を考えているんだよ。色々」と

「まあなあ、あの人2年前に32歳で課長に昇進したらしいけど、それがウチの会社の最年少昇進記録になっているみたいだし」

「えっ、何それ」

私は驚いて徳永を見れば、徳永ははあ、とため息を吐いた。

「そんなの皆知ってるよ。お前位じゃないの？知らなかったの」

呆れ気味にそう言われて軽くへこんでしまふ。

全然知らなかった。私って本当に何も知らないんだ。

「まあ竹原は自分の事でいっぱいいっぱいだろうしね」

そうしれつと言いのける徳永を軽く睨め付ける。

でも本当の事なので言い返せない自分がなんとも言えず、黙ってしまった私を見て徳永は肩を竦めた。

「本当の事言ってごめん」

「そこなにかフォローを入れるところじゃないの？」

私が笑って拗ねた仕草を見ると徳永は至極真面目な顔をして

「フオローして欲しいならするけど。あー、竹原は不器用なだけだもんな」と返してきた。

「それフオローになってないしどうせ不器用ですよ。」

徳永を見ると、とても愉快そうに笑っていた。

こういう時の徳永はとても生き生きしている。からかい上手と言っかなんと言っか。

仲の良い他の同期にも同じ事をしているから、これは徳永の素の部分なのだと思う。

同期として気軽に接して貰えているようで嬉しかった。

「そんなだと可愛い女の子が寄ってきてても逃げられるんだからね」私がそう言っても徳永はどこ吹く風で

「そんなへまはしないよ。好きな女の子には優しい質だね。じゃ先戻るわ」

と言つて徳永は立ち上がった。

「はいはい、そーですね」

「仕事、遅れるなよ？」

そう言い残して立ち去る徳永の向かう先の壁に時計が掛かっているので、何気なく見てみれば時計の針は1時5分前を指している。

話に夢中だった私のお皿にはまだカレーと豚カツが半分程残っている。

「そういう事は先に言つてよ徳永！」

もう既にいない徳永に聞こえるはずもない抗議の言葉を零して、慌てて残りを食べた。

流れ始める。 2

夕暮れに沈む街はオレンジ色に染まり、朝と違ってゆったりとした足取りの人々が駅へと向かう。

今日は、駅前のスーパーのお惣菜が安くなる日だからスーパーでお惣菜を買っていこう。

そんな事を考えながら歩いていると

「竹原！」

と誰かに呼ばれたので後ろを振り向くと課長が私に近づいて歩いてきた。

「お疲れ様です課長」そう言って会釈をすると課長は右手を上げて「おうお疲れ」と返してくれた。

課長がそのまま歩き出したので私も一緒に肩を並べて歩く。

「この時間に帰るのが久々過ぎてなんだか違和感を感じるなあ」

「そうですね。ここ何ヶ月かずっと残業されてましたよね」

右隣を歩く課長を見上げると課長は私を見て苦笑いを浮かべた。

「休日出勤をあまりしなくて済んだのがせめてもの救いだっただな」

「ホントお疲れ様でした」

「まあ次のプロジェクトが立ち上がったらまた残業続きになるだろうがな」

「束の間の休息ですnee」

私がそう言うと課長は

「仕事に出てるから休息とは言えないだろう」

と溜息を吐いて笑った。

朝と同じ位の人が乗った電車内。私と課長は流れに流されて乗り口と対面になっっている反対のドア側へと押しやられていた。

そんな状態なものだから、課長とも必要以上に距離が近い。

対面の状態で身動きも取れないからとても気まずい。

私は視線を何処に向けたら良いのか分からず、課長のネクタイのス

トライプの数なんて数えてみたりしている。

電車に乗ってからずっと、課長のシトラスと何か甘い匂いが混じった香りが私の鼻孔を擦ってくる。

この前駅で遭遇した時も同じ匂いがしたっけ。

「満員電車も久々だな」

小さな声で課長が呟いた。

満員電車に乗る事があまり無いのだろうか。

「そう言えば課長って朝何時の電車に乗ってるんですか？同じ所から乗るのに今まで一度も見たこと無いのが不思議だったんです」

私も同じように小さな声で課長に尋ねた。

「ああ、会社に7時半に着くように電車に乗っているからな」

「結構早めに出社されてるんですね」

だから今まで遭遇することが無かったのかと納得した。

「課長ってホント仕事が好きなんですねえ」

感心しながらそう言うのと課長は自嘲の色が混じった笑い声を漏らし

「そんなんだから彼女にも逃げられるんだよなあ」

と、落ち込んだ声で言った。

あ、何か地雷を踏んでしまったかも。

何かフォローしなきゃ。そう思った私は慌てて

「課長はすっごい面倒見が良いから良い人が必ず見つかりますよ！」

と言った。数秒の沈黙。すると突然課長はくくっ、と吹き出した。

私、何か可笑しな事言っただけ？そう思いながら顔を上げて課長を見上げると、課長は笑いを堪えていた。

「面倒見が良い奴が必ず良い人を見つけれられるなら世の中の男は皆彼女持ちだぞ」

「えっ、あっ、そうですよね…」

フォロー失敗。こういうフォローをしようとするとは時事的はずれな事を言ってしまう。

イレギュラーな事への反応が鈍いのも私の欠点だ。

「そう落ち込むな。竹原なりに励ましてくれただろ？ありがとう。」

眼鏡の奥の課長の瞳はとても優しくて。柔らかな眼差しが向けられて私は妙に落ち着かなかった。仕事中には絶対に見せない表情に戸惑う。

そう言えばすごい近くにいたんだった。

急に私と課長の距離を思い出して恥ずかしくなる。思わず顔を俯かせると、丁度車内アウンスが降りる駅の名前を告げた。駅に着く事がこんなに待ち遠しいのは初めてだった。

課長が先頭に立って進路を作ってくれたのでそんなに苦労する事もなくホームに降りることが出来た。思わずほっとため息を零す。

「あー、窮屈だったな」

隣を歩く課長は心底嫌そうに言うものだから思わず顔が綻ぶ。

「そうですね。まあいい加減慣れてきましたけど」

「俺はあれには一生慣れないな」

そう言う課長をちらりと覗き見ると、いつもの課長だった。なぜだか少しホツとした。

「あ、そう言えば今日駅前のスーパーのお惣菜が安いんですよ」

私は気持ちを切り替える為にそんな他愛もない話を切り出した。

「へえ、そんなのがあるんだな。全然知らなかった」

「あのスーパーのお惣菜、すごい美味しいんです。特に唐揚げがすごいジューシーなんですよ。あとお弁当も種類が豊富で」

意気揚々と語る私に課長は怪訝そうな表情を浮かべた。

「竹原は自炊はしないのか？」

私は一瞬言葉に詰まる。

「あー…えっと…時々やっています」

しどろもどろにそう答えてみたけれど実は料理だけはどうしてもダメで。

自分で作ったものがどうしても美味しく感じられず、いつもお惣菜とかで済ませる様になってしまった。

曖昧に笑う私を見た課長は一つ溜息を零した。

「竹原、今日の夕飯ウチで食っていけ。作ってやるから」

「いいえそんな！申し出は有難いのですが、お手間を取らせてしまうので私の事は気にしないで下さい！」

慌てて首を左右に小刻みに振りながらそう言っても課長は引かなかった。

「1人分も2人分もそこまで変わらん」

「でも、ホント申し訳ないですし」

流石にそこまでしてもらうのはかなり気が引けるので私は辞退する為にそう言うのだけど、課長は全く意に介さない様子で

「一人で食べるのも飽きていた所だ。それに料理作るのも好きだしな」

なんて言いながら駅の構内から外へと出た。

外は既に暗くなっていて家々の灯が煌々としていた。

スーパーは直ぐそこ。私はどうしたものかと思案していると、課長は立ち止まった。

「…あー、考えたら迷惑だよな。いきなり上司の家に行って食事をするのモ」

立ち止まって課長を見上げると苦笑いを浮かべていた。

私の言い方が悪かったのか、課長は私が迷惑がっていると思ったらしい。

「いいえ！迷惑だなんて思っていないません！むしろこちらが迷惑を掛けているようで申し訳ないんです」

私はあたふたと慌ててそう言うのと課長は少しの間、眼鏡の奥の瞳で私の感情を推し量るように真っ直ぐに私を見て

「本当に？」と尋ねてきた。

すかさず私はこくこくと頭を上下に振り

「本当ですつ。私人に作って貰ったご飯が大好きで、手作りのご飯とかもう単語を聞くだけで物凄くわくわくするんですけど、課長は上司ですし、ご迷惑になるかと思うと気が引けてしまうんです」

私も誤解して欲しくないので課長の目を真っ直ぐに見つめて言うつと

課長は、にっといたずらつ子みたいな笑みを浮かべて

「じゃあ問題無いな。竹原は夕飯をウチで食べていくように」そう
言ってまた課長は歩き出した。

「あ、あれ？課長、私の話聞いてましたか？」

私も課長の後を追いかけて歩き出す。

「問題無いだろう。俺は迷惑だなんて思っていないし竹原も、一緒に
食べたたくないって訳でもないんだから」

まんまと課長の策略に上手く乗せられてしまったらしい。

「そういうモノなのでしょう…」

まだ納得出来ないでいる私に

「気にするな。俺が料理の腕自慢したくて誘っただけだ。料理が好
きなんだけど、誰にも振る舞う機会が無くてな。そこで竹原に白羽
の矢が立っただけだ」と返してきた。

ここまで言われてしまうとこれ以上断るのも逆に失礼な気がして。

私は課長の申し出を受ける事にした。

流れ始める。 3

課長の部屋は7階の角部屋だった。

間取りは同じ2LDKなのだけど、一つ違うのは窓が一つ多い事。しかも私が密かに憧れている出窓。

それにしても。課長の部屋は片付いていることは片付いているのだが、やや雑然としていた。

雑誌と本が部屋の隅に纏まって積みまれていたり、カウンターキッチンのカウンターの上にコーヒーメーカーや挽かれたコーヒー豆の入ったパック、お砂糖といったものがちょこちょこ置かれている。

もったきちゃんとした部屋を想像していたので少し拍子抜けしてしまった。

「あー、あまり部屋の中を観察しないでくれ」

別の部屋でVネックの体にフィットしたダークグレイのセーターと濃い目の色のジーンズに着替えてきた課長が少し照れた表情でそう言うまで私はあちこちに視線を向けていた。

「す、すみません！」

慌てて見回すのを止めると、課長は苦笑いしながら

「まあ、ソファアにでも座って待ってる」

とソファアを勧めてくれたのでスーツのジャケットを脱いで座ることにした。のだけど、落ち着く訳もなく。

上司が料理をしているのに自分だけ座っている訳にもいかず再び私は立ち上がり、台所へと向かった。

「課長、何を作るんですか？」

そう言いながらキッチンに入ると、課長は冷蔵庫の中から食材やタッパーを取り出していた。

「座ってるって言ったろ？竹原は落ち着きが無いなあ」と言って課長は笑い「先週久々に作り置きや仕込みが出来たから色々食べさせてやれるぞ。何か嫌いな物はあるか？」と訪ねてきた。

「私は特に好き嫌いは無いので大丈夫ですよ」

「そうか、なら何出しても大丈夫だな」

課長は、五徳が2つ乗ったガスコンロにフライパンと水を張った鍋を置いて火をつけると、てきぱきとまな板と包丁を用意し、セータの袖を捲り上げて野菜を洗い始めた。

課長の慣れた動作に、一瞬何故台所までやってきたのか忘れかけたけれど、当初の目的を思い出す。

「何かお手伝いしましょうか？」そう尋ねたら課長は洗い終えた野菜をまな板の上に乗せて

「足手まといになるからいらん。テレビでも見ている」と私の言葉を一蹴した。

「うう…酷いです課長。私だって包丁くらい握れます」

軽くへこみながらソファアへ戻ってそう呟くと、課長はくくつと笑い声を漏らした。

「竹原の場合は本当に包丁を握るだけだろう？」

「…大人しく料理が出来るのを待ってます」

まあその通りなので悔しいけれど反論は出来ない。

実家でも何回か母の手伝いをしたことがあるけれど何時も最終的に台所を追い出されていたっけ。

テーブルに置かれたリモコンに手を伸ばしてテレビを点けると、何時も見ている刑事ドラマが始まっていた。

ゆったりとソファアに背中を預けてぼんやりとテレビを眺める。

主人公とそのペアの相棒とのテンポの良い掛け合いをくすくす笑いながら見ていたのだけど事件現場の調査が始まった頃、私にも事件が起こった。

睡魔が私の意識を乗っ取ろうとしてきたのだ。

初めてお呼ばれした部屋で寝こけてしまうのもかなり失礼だ。と考えながら私は睡魔と戦う。

瞼が下へ降りようとする度に一生懸命瞼をどうにか閉じないように意識するのだけど、座り心地の良いソファアに身を預けているとそ

れも徐々に効果が無くなっていく。終いには自分の頭がカクン、となる度に瞼を開く状態になってきた。

不味いな、目を閉じないようにしないと　　…。

不意に遠くで誰かが会話している声が小波の様に聞こえた。ポンポンと大きな誰かの手が私の頭を撫でる心地よい感触。

あ、気持ちいい。思わず上がる口角。このまま撫でていて欲しいな。そんな思考が頭を過ぎる。

ふわりと甘い香りが漂い鼻孔を擦った。この匂い、何処かで嗅いだ事がある。何処で嗅いだっけ？

そんな事を考えていたら急に唇に何か暖かくて柔らかいものが触れて　　これは、何？唇？なんで唇が　　…。

その刹那、覚醒する意識。勢い良く瞼を開く。

途端にテレビの音が洪水の様に溢れて耳へと流れこむ。テレビは怪しげな人物が主役の刑事に尋問を受けている場面を映し出していた。あれは、夢？ぼんやりとする頭を目覚めさせようと小刻みに頭を左右に振る。

「丁度良かった。ご飯出来たぞ」

そう言いながら課長はソファの前のテーブルに座ろうとしていた。

「あれ？え、ああつ！すみません課長！私寝ちゃってました」

慌てて謝りながら立ち上がると、課長は特に気にする様子も無く

「そんなの知っているよ。まあ気にするな。取り合えず冷めないうちに食べよう」

と課長の向かい側の席を手で指し示した。

「あつ、はい」

変な夢を見てしまった。しかも他人の部屋で。私は恥ずかしさを感じながらも指し示された場所へと座り、器に入った料理に目をやる。「うわ…、これ全部課長が作ったんですよね？」私は目の前に置かれた料理を見て感嘆の声を上げた。

白米、ほうれん草とわかめの味噌汁、みじん切りにされたキャベツの上に乗った豚肉のしょうが焼き、人参とごぼうのきんぴら、大根

と人参が千切りになった酢の物、レタスにきゅうりとトマト、粉チーズが乗ったサラダ。

家庭的な料理が私の目の前に繰り広げられている。

「俺以外に誰が作るんだよ。ほら、食べる食べる」

はにかんだ表情の課長は眼鏡を右手の人差し指で押し上げて、両手を合わせると「いただきます」と言った。

「あつ、いただきます」

私も両手を合わせた後、お箸を手に取った。まずは生姜焼きに手を伸ばす。

お箸で豚肉でキャベツを包み込むように持ち上げて、そのまま口の中へと運ぶ。

美味しい。お肉の中までタレの味が浸透していてほっぺたが落ちそう。お肉も丁度良い焼き加減で。思わず顔が緩む。

「どうだ、味は？濃くないか？」

課長はやや不安げな表情で私の様子を伺っている。

私は勢い良く首を横に振り「いいえ！丁度良い加減ですごく美味しいですっ」と勢い良く言うと、課長は私の勢いに驚いたのか目を瞬かせて、ふっ、と笑い「そうか、なら良かった」と言っつて、眼鏡の奥の瞳を優しげに細めた。

またあの瞳だ。不意に電車での記憶が蘇る。シトラスの混じった甘い匂い。

それと同時に私は夢の中の匂いの答えに辿り着いた。さっきの夢の匂いは課長の香りだ。それに気づいた瞬間私の顔は熱くなった。

なんて夢を見てしまったんだろう。私は酷く狼狽した。急激に早くなる鼓動。何を意識しているのだろう。たかだかそんな夢を見ただけで意識してしまうなんてどうかしている。

そう思うのだけど、鼓動は煩いままで。

困惑する意識をそちらへ向けないようにする為、私は食べることに意識を集中した。

食事を食べ終わった後食後のお茶を少し飲んで、私はあまり長居

するのも悪いと言って課長の部屋を後にした。部屋に戻るとほっと溜息が漏れる。

ちゃんと普通に振る舞えていただろうか。食事の間会話を交わしていたのだけど、何をしゃべっていたのかあまり覚えていない。少し心配なのだけど、課長も特に私の様子を訝しむ事も無かったのでそこは大丈夫だろう。

それにしても、あの夢は一体何。私は思わずソファーに倒れこむ。妙にリアルだった夢。唇の感触が蘇って思わずジタバタとソファーの上で身悶える。

「はあ……」

なんだか妙に疲れる1日だった。

流れ始める。 4

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

今日も課長の部屋にお邪魔してご飯を御馳走になっている。

会社最寄りの駅で課長と遭遇して、一緒の電車に乗り、昨日と同じ様なやりとりの後（今回は忘年会で一発芸やらせるぞ、と言われた）こうしてまた課長の部屋に来ることになった。

今日は白米、荳わかめと油揚げのお味噌汁、大根おろしの付いたアジの開き、オクラとなめこの和え物、かぼちゃのそぼろあんかけ、それに柚子の皮が入った白菜の浅漬け。

やはり昨日と同じ様に家庭的な料理が目の前に繰り広げられていて、私は顔が緩むのを止められない。

「課長、良い奥様になれますよ」

茶化すように私がそう言うのと課長は少し不機嫌な顔になり

「煩い、早く食べる」と言っつかぼちゃを乱暴に自分の口へと放り込んだ。

そう言った課長の耳は少し赤くなっている。どうやら課長は恥ずかしいと不機嫌な態度を取るらしい。

私はこれ以上課長の機嫌を損ねないように、油断すると緩む顔をどうにか抑えて、おくらとなめこの和え物に箸を伸ばした。

「ああそうだ竹原、明日の接待の事なんだが」

「ああ、はい」

忘れていた訳では無いのだけど、なるべく考えないようにしていたので不意打ちを食らって少し声が上がってしまった。

「勝田課長は酒豪だから、あの人のペースに合わせて飲んでると痛い目みるぞ」

「あ、はい分かりました」

内心ほっとしながらそう返事してはみたのだけど、明日の事を考え

ると心に疲労感がどつと押し寄せてきた。

終業直後のオフィスは、あちらこちらで人の話し声が絶えず波の様に聞こえてくる。

言葉という形を成さない（時折単語は聞こえるけれど、やはりそれは断片的で余程集中しないと何を話しているのか分からない）音に耳を傾けながら私は、この後の事を考えていた。

勝田課長のセクハラが課長が居ることによって出て来ませんように。そう願わずにはいられなかった。

勝田課長のセクハラは、物凄くねっとりとしていて湿っぽい。セクハラと言ってはいるけれど、これがセクハラなのかどうかも実は私自身も分かりかねている。

「彼氏とはどうなの？」とか「最近ご無沙汰？」とか直接的な言葉は無い。まだソツチの方が可愛げがある。

「そのネツクレス良く似合っていますね。竹原さんは鎖骨のラインが綺麗だから鎖骨を強調してよく映えています」といったような、身体的な特徴を言い交えながら褒めたりしてくる。

最初は全く気づかなかつただけで、言われる回数が増え、きて違和感を感じる様になった。今では相手先に出向く度に言われている。

他の人が聞いたらなんて事は無いかも知れない、寧ろ自意識過剰と言われかねないのだけど私はどうも苦手だった。現に私も最初は気づかずに徐々に違和感を感じはじめたのだから他の人がそう思っても無理は無い。

いかにもモテそうな渋いおじ様タイプだから社交辞令のノリで言っているのかもと思った時もあったのだけど徳永曰く「そんなエロ目線の社交辞令があつてたまるか」と一蹴された。

そんな微妙な状態なので私は徳永以外の誰にも相談することが出来なかった。

私は言い様の無い嫌悪を感じながら無駄だとは分かっているけれど、会社を出るのを少しでも伸ばしたい為に緩慢な動作で帰り支度をし

ていると、向いの席の徳永が立ち上がって今まさに帰ろうとしていた。

羨ましい。羨望の眼差しを向けていると徳永が視線に気づいたのかこつちを見ると苦笑いを顔に浮かべた。

「なんて顔してるんだよ」

「だって、この後の事を考えるとかなり憂鬱なんですよ」

ため息混じりにそういうと、徳永はほんの少しの間考える仕草をして

「ああそうか、今日だったな勝田課長の接待」と言った。

「そうなんだよねえ。昨日からもう憂鬱で憂鬱で」

「今日は課長もいるから向こうも変な事は出来ないだろうし、料理を楽しむ位の気持ちで行ってこい」

「そうするよ。今日は高級中華だしね！あ、私そういうレストランって実は行くの初めてなんだ」

努めて明るく振る舞いながら徳永に笑ってみせると、徳永はふつと息を吐いた。

「あまり深く考えずに聞き流せよ？」

「うん、分かった」

私がそう返事した所で、課長が私の席にやってきた。

「竹原、そろそろ行くぞ」

スーツの上からコートを着て手には鞆を持っている課長は直ぐにでも出られる、といった状態だった。

「あつ、はい」

それを見た私はおもむろに椅子から立ち上がると、徳永は

「それじゃあ課長、お先に失礼します。竹原もお先」

と、言っただけで廊下へと向けて歩き出した。

「おう、お疲れさん」

「お疲れー」

先に家路につく徳永の背中を見て少し羨ましく思いながら私は、課長と共に接待の会場へと向かった。

最初の場所は課長が予約した割りとう有名な高級中華料理のレストラン

ラン。勝田課長とはここで合流する事になっていたので予定時間より少し早めに着いていた。

個室が完備されていて落ち着いた中国風の内装。壁に漢文が書かれていたり、丸くくり抜かれた壁に瑞々しい花々が生けられた花瓶が置かれてライトアップされている。

部屋の中央に糊の効いた白いテーブルクロスが掛かった円形のテーブルが置かれていて中華料理屋で定番の回る台が乗っている。

思わずキョロキョロと見回している

「竹原はこういう所に来るのは初めてなのか？」

苦笑交じりにそう問われて私は恥ずかしさから少し顔が熱くなった。

「はい、そうなんですよね」

照れ笑いを浮かべながらそう答えると

「まあ俺も仕事以外ではこういう店には中々行かないしな。これからこういう機会が多くなるから竹原もその内慣れるよ」

と課長は言ってくれた。

一通り内部のチェックやレストランの人との軽い確認を終える頃には約束の時間がやってきたので私と課長はレストランの入口へ勝田課長を迎える為に向かった。

流れ始める。 5 (前書き)

1 2 / 1 3 : うわー or z 最初の一部が何故か消えていましたので追加しています。気づかなかった…

流れ始める。 5

レストランの玄関前に出てから、数分後。一台のタクシーが緩やかな速度で玄関前に滑りこんできた。

ドアが開いて課長よりも年齢が少しだけ上に見える男性が、タクシーからゆっくりと降りてこちらへやってくる。

勝田課長だった。

傍目から見ても上質な物と分かるコートの裾を翻しながら歩くその身のこなしは綺麗で無駄な動きが無く、洗練されていた。

「お待ちしておりました、勝田課長。いつもお世話になっております」

そう言ってお辞儀をする課長に合わせて私も「いつもお世話になっております」と言ってお辞儀をした。

「まあまあ藤原課長も竹原さんもそう畏まらないで下さい。堅苦しいことは抜きにして今日は楽しみましょう」

勝田課長はそう言うのと笑みを浮かべた。目の弧の描き方、顔の筋肉の動き、口角の上がり方、どれも完璧な形を成していた。まるでそれが役割であるかのよう。

個室へ戻ると、まず勝田課長が入り口から一番奥の席へと座った。続いて課長が向かって右側、勝田課長を挟む様に私はその左へ。

すると直ぐに人数分の水の入ったグラスと竹かごに入ったおしぼりを持ったウェイターがやってきて私たちの前に置いて去っていった。すかさず私は、勝田課長の手元に置かれた程よい熱さのおしぼりを竹かごから取り、広げて勝田課長の前へと差し出した。

「どうぞ」

「有難う竹原さん」

そう言っただけで勝田課長はおしぼりを受け取るうとしたのだけど、勝田課長の指が私の指を掠めた。

不可抗力のアクセシブル。だと思いたい。流石に体に触れる様な夕

イプの事はしてこないだろうし。

「ああ、すみません」

そう言つて勝田課長は少しだけ申し訳なさそうな表情で笑つた。

「いいえ、お気になさらないで下さい」

私もそれに習つて笑顔を作つただけで、触れた部分から悪寒が体を駆け巡つて気持ち悪かつた。

ちらりと勝田課長の様子を伺つてみるけれど、まだ何も不快なことを言つてこない所を見ると他に誰かがいるのは結構効果があるようだ。

案外今日は楽しめるかも知れないな。そんな楽観的な考えが頭を過ぎつた。

それから、和やかに食事は進んだ。勝田課長は課長の言つた通り酒豪だつた。

後から追加したビール3本と老酒を殆ど課長と二人で空けていた。

私はといえば一番下つ端と言つこともあつてあまり飲んでいないのだけど、それでも少し良い気分だつた。

それにしても、並んでいる料理は地元の近所にある中華料理屋さんでは見たことが無い品々ばかりだつた。

初めてフカヒレのスープには感動した。…とは言つてもフカヒレの良さはよく分からなかつた。

エビとマカダミアナッツの炒め物も美味しいし、タレがかかつたスライスされている乳白色の物体を恐る恐る取り皿に移して食べてみたら歯ごたえの良い貝、というよりそれは鮑だつたみたいで、美味しい料理の数々に私は浮かれていた。

「いやあ、藤原課長、竹原さん、良いレストランに連れてきて貰いました。今度プライベートで来てみることにしますよ」

そう言つ勝田課長はタクシーから降りてきた時と何ら変わらない顔で綺麗な笑みを浮かべてグラスの老酒をくつと一飲みした。

羨ましい。私なんてプライベートでこういうレストランに来られるようになるのはどれ位先だろう。なんて考えながら

「そう言つて貰えると光栄です。藤原が是非勝田課長に紹介したいと言つ事でセツティングさせたいただきました。私はこういうレストランはお恥ずかしながらあまり詳しくなかつたもので」

と言つて私が苦笑いを浮かべると課長は得意げに笑つて

「入社1年未満にはちよつと敷居が高いからな」とからかうように言つた。

私も負けじと

「今後来れるように頑張りますので、それまでは課長、こういうレストランに教育の一環で連れてきてください」とにっこり笑つて言い返せば、課長は

「俺の財産が尽きる前までに来れるようにしてくれよ?」と返してきました。

勝田課長はそれを聞いて

「お二人とも仲が良いですねえ。なんだか兄妹のやり取りを見ているみたいですよ」

と私と課長を見て笑つた。やっぱりその顔には完璧な笑みを浮かべて。

私は勝田課長のこの笑みがあまり好きではなかつた。完璧過ぎて、逆に作られた笑顔に見えて少しだけ恐かつた。

「そうですね、竹原を妹みたいだと思つているかも知れません。危なかつかしくてつい世話を焼いてしまふといえますか」

そう言つて課長は苦笑いを浮かべた。

「へえ、そんなんですか。竹原さんは良い上司に恵まれて良かったですね。私はそこまで深く掘り下げて部下に接することは中々出来ないですからねえ。そこが藤原課長の良い所だと思いますよ」

にっこりと笑う勝田課長に、課長はとんでもないと言いたげに

「お褒めに預かり光栄です。しかし勝田課長はそのように仰られています、色々な方からお話をお伺いしていますよ」と言いながら私を見たので私もそれに続いて

「そうですね、この前お伺いした時に堺さんが自慢されてましたよ

？」

と私にこやかに言う。勝田課長は「堺はまた要らないことを」と言つて溜息を吐いた。

「私はそんなに立派な人間ではありませんよ。自分のしたい事を押し通したりしますしね」

薄く笑んだ勝田課長はグラスの残りの老酒を飲み干した。

課長はすかさず残り少ない老酒の瓶を傾けて勝田課長のグラスへと注ぐと

「貴社の色々な方が口を揃えて勝田課長は素晴らしいと仰られているのですから、それだけ慕われているのですよ。私も勝田課長のやり方をよく参考にさせていただいてます」と言う課長の顔からは親しみを込めた感情が読み取れた。

「そうだといいのですがね」と言うと、勝田課長は薄く笑みを浮かべた。

食事も殆ど無くなり、お酒も残量が後僅かだったので私は支払いを済ませる為、お手洗いにいくと告げて席を立った。

支払いを済ませてお手洗いにいくと、乳白色のつやつやした石のフロアに、フロアと同じ色の正方形にくり抜かれた壁には瑞々しいピンク色の山茶花の一輪挿しが置かれていた。

「やっぱり良いレストランはお手洗日も綺麗だなあ」

思わず口に出してしまい、慌ててお手洗いの連なった個室に目を向けたけれど、ドアはどれも開いていた。

ほっと息を吐いて鏡を見ると、お酒で赤くなつた私の顔が目に入った。そこまで飲んでないのになあ。

思わず苦笑いになる。

次は近くのホテルにあるジャズバーだけど席に戻る前にタクシーを呼んでおかないとな、と次の行動を考えながらドアを開けると、勝田課長がお手洗いのドアの左斜め向かいに立っていて私は驚きのあまり声を上げそうになった。

流れ始める。 5 (後書き)

ちよーつと次回は見る人によっては引くような内容になると思われます。

流れ始める。6 (前書き)

遅くなりました。

流れ始める。 6

「そんなに驚きましたか？」

完璧な笑顔を浮かべると、腕を組んで壁に寄りかかっていた勝田課長は私へと近づいてきた。

「あ、その、大変失礼致しました。誰かと鉢合わせるとは思わなくて」

恥ずかしさからしどろもどろになりながらそう言つと、勝田課長はふ、と笑い声を漏らした。

「竹原さん、今日は随分とリラックスされてますね」

「え？」

私はその言葉の意図を測りかねて勝田課長を見上げる。

すると勝田課長はするりと私の顎のラインに指を滑らせた。

「……」一瞬で鳥肌が立つ。そこで漸く私は勝田課長と二人きりで且つ近距離にいるのだということに思考が行き着いた。

「藤原課長がいるから、ですか？」

につこりと笑う勝田課長から逃げようと後ずさると、それに合わせ勝田課長も私に近づいてくる。

一刻も早く逃げ出したい、だけど勝田課長はその隙を与えてはくれなくて。

じわじわと追い詰められて、まるで肉食獣に追い詰められる草食動物の様だ。なんて考えが頭を過った。

とん、と壁に背中がぶつかる感触がこれ以上後ろに道が無いことを告げると、すかさず横へ逃げようと横へ踏み出そうとした。

だけど私の顔の横に勝田課長の両腕が伸びてきて逃げられない状態にされてしまった。

「逃がしませんよ？」

勝田課長はどことなく楽しげだった。どうしよう、この場からどうにか逃げ出さないと。

「あははっ、勝田課長は冗談がお好きなんですね」

咄嗟に口をついて出てきた言葉。今ならまだ冗談で済ませられる、言外に含ませてぎこちなく笑みを浮かべながらそう言ってみただけど、期待した言葉は勝田課長の口から出てこなかった。

「冗談でこんな事する訳が無いじゃないですか」

おかしい事でも聞いたかのように、くつくつと笑う勝田課長はなんだか艶かしかった。

「竹原さんの事が、気に入っているのですよ」

「気に入って…?」

「そう、気に入っている。端的に言ってしまうえば、好き、という事です」

言葉の意味が一瞬理解できず、私は混乱した。気に入っている?好き?あんな態度で?疑問ばかりが頭に浮かぶ。

「え…、好き?私をですか?」

「そうですよ」

笑顔を浮べている勝田課長はどこか楽しそうだ。私の反応を楽しんでいるのかもしれない。

「…セクハラして、私の反応を見て楽しんでいるのかと思ってました」

思わずはつきりと言ってしまい、しまった、と思いながら勝田課長を見ると、勝田課長は私を見下ろして、口角を上げた。

「セクハラとは人聞きが悪いですね。あれも愛情表現の一種なんです」

「愛情表現?」

「そうです、愛情表現」

こくりと頷く勝田課長を見て私は更に混乱した。私が今まで不快に思っていた事が愛情表現?不愉快な感情がドロつと心のなかに流れ込んできた。それは勝手に自分の持ち物を利用された時の感情によく似ていて。

「…そんなの可笑しいです。体のラインがどうか鎖骨がどうか、

そんな…愛情表現聞いたことありません」

勝田課長は小首を傾げた。

「そんなにはつきり言われてしまうと傷つきますねえ。それに、あなたが今までそういう風に愛情表現をされた事が無いからであって、知りもしないことを簡単に否定するのはどうかと思いますよ」

「それは…そうかも知れませんが…」

「人というのは自分が経験した事が無いことには否定的なものです。幽霊だって、未確認飛行物体だってそうです。見たことが無いのに結局、いないと決めつけてしまう人が殆どだ。結局自分の経験の中でしか物事を押し量れないのですよ。そんなの、つまらないと思いませんか？」

一見正当性が有る様に見える屁理屈という名の論調に返す言葉が浮かばなくなる。

「けれどここで言い包められてはまずい。」

「確かに…そうかも知れませんが。でも、不快な事を言われてそれが愛情表現だと感じる人は少ないと思います」

そう言うとき勝田部長は少しだけ肩を竦めて

「竹原さんは不快と思ったかも知れないですが、今までその様な事を言われたことは無いですよ」と言った。

自分の外見を理解していて勝田課長は今まで同じ事をしてきたのかもしれない。

女性なら容姿の良い男性にどんな事をされても喜ぶものだ、という考えが透けて見える。

それに、この人は物凄く理不尽だ。私のことを好きだと言っているけれど、実のところ私のことは微塵も考えていない。

しかも、自分の言っていることが私に不快感を与えていることを知っていて止めないなんて。

そう考えると無性に腹が立った。

「そんなの詭弁です。自分勝手ですよ。他の人は良くても私には不快だったんです。知ってますか？セクハラは受け手が不快に感じた

時点でセクハラが成立するって」

私が睨むと勝田課長はおかしな事を言う、と言いたげな表情でくつと笑った。

「セクハラ、ですか。竹原さんが他の人に話をしても別に構いませんよ？ですがよく考えてみてください。証拠も無しに言った所でどれ位の人間が信じると思います？あなたをよく知っている周りの人間なら恐らく信じるでしょう。ですが、職場の人間はどうですか？あなたの上司である藤原課長は信じるかも知れない。でもその確証は何処にもない。更に上の上司、役員はどうでしょうか。私はその方々とは面識がありますし、あまり接点の無い、入社して1年未満の人間の言葉を信じると思いますか？私にセクハラをされたと言っても私の弁明を受け入れる確率のほうが高いですよ。それに私は社での人望も厚い。それは竹原さんもよく知っているはずですが」

悔しいけれど実際に勝田課長の言う通り証拠になる様な物なんて何もなかった。

実績がある人間とそうでない人間では、どちらの言い分が通るかなんて明白だ。

「更にもう一つ言っておくと、私が先手を打ってしまうことも可能なのですよ？竹原さんが私に振られた腹いせに私にセクハラされたと言いつらしている、そんな公私混同する社員のいる会社とは取引したくない、とか」

自分のはっ、と息を呑む音がやけに響いて聞こえた。

「…脅しですか？」

「脅してなんかいませんよ。ただ、私次第で竹原さんの今後が決まるのになあ、と思っただけです。この不景気の中、取引が中止になったら大問題ですよね」

顔がかっ、と熱くなる。

「それが脅しなんじゃないですか！」

「脅しじゃありませんよ。交渉です」

「交渉？」

「そう、交渉。言ったでしょう？私はあなたを気に入っていると」
勝田課長の腕がぐつと私の体を抱き寄せた。

「や、やめて下さいっ」

私は、両腕で体を押し離そうとするのだけど力で叶はずもなく、胸部から上がくつつかないようにするのがやっとだった。

「私のモノになってしまえば良いのですよ」

その瞳は獲物を前にして舌なめずりをする肉食獣の様に鋭く輝いていた。

「やつ…！」

恐い。そう思った瞬間、反射的に勝田課長の顔へ向けて手をスイングさせていた。

けれど、勝田課長にあっさりと私の手首を掴まれて阻止されてしまった。

「意外と竹原さんは気がお強いようだ」

その言葉の後、手首を捕らえている勝田課長の手の握りが強くなった。

「……っ！」

掴まれた場所の骨が痛みを訴えてくるけれど、痛みにも声を上げたくなくてきゅつと唇を噛み締めた。そんな私の様子を見て勝田課長は薄く笑んだ。

「そんなに唇を噛んではダメですよ」

勝田課長の顔が徐々に私の目の前に近づいてくる。キスしようとしている。直ぐにそう気づいて私は顔を背けようと首を逸らすのだけど、それを咎めるかのように手首の戒めが更にきつくなった。

「……い、っ」

目を瞬かせると涙が薄い膜を張った。この人の前では泣きたく無かったのだけど、涙腺が緩み始めていた。目の端にゆるゆると涙が溜まっていく。

「何してるんですかっ！」

私の目の端から涙が零れるのと課長の声が聞こえたのは同時だった。

流れ始める。 7 (前書き)

問題：勝田課長の言葉の中で作者が自虐の意味を込めた言葉があります。

それはどれ！

流れ始める。 7

「勝田課長、これは一体どういう事ですか」
課長は眼鏡を外しながら、鋭い視線を勝田課長に向けて近づいてくる。

会社でよく見かける不機嫌な空気よりも更に一層濃い空気を纏って、何時もよりきつい空気を纏っているけれど、それが妙に私を安堵させた。

「あなたには、関係の無いことですよ」
そう言つて薄く笑みを浮かべると勝田課長は私を掴んでいた腰と手の拘束を解いた。

ゆるゆると溢れる涙を手の甲で拭いながらすかさず私は課長の近くへと逃げようとしたのだけど、足がもつれてうまく歩けなくてよろけてしまった。

「大丈夫か竹原」

課長が慌てて空いている方の手を差し伸べてくれたので私はどうか床に倒れこまずに済んだ。

「あ、ありがとうございます…」

と言つて課長を見ると、課長は握った私の手を凝視していた。正確には手と言ふよりも、勝田課長に掴まれて赤くなった手首を。

私は居た堪れなくなつて赤い手首を凝視する課長の視線から逃れるように手を体の後ろへと隠した。

課長は眼鏡をスーツの内ポケットに仕舞つと、勝田課長を睨みつけた。

「…関係ない？こんなに怯えて、赤くなるまで手首を掴まれている状態の人間を放つておける訳が無いでしょう」

今まで一度も聞いたことが無い、怒りの籠った低い声。課長は勝田課長を睨みつけたのだけど当の本人はその視線を寧ろ楽しんでる様に見えた。

「本当に藤原課長は良い方だ。そこまで竹原さんに執着するのは部下だからですか？それとも、妹の様な存在だからですか？」
その言葉に課長は眉根を寄せた。

「執着などしていません。今現在も接待という名の仕事をしています。ですから、部下が何かトラブルに巻き込まれていたら助けなければいけないと思っただけですが、いけませんか？」

勝田課長はく、と笑い声を漏らした。

「本当にそれだけですか？」

勝田課長は何か含みを持たせて言うと、じつと課長を見た。

「…何が言いたいのですか？」

課長もその視線を受けて勝田課長を見据えた。

「いいえ、別に。ただいずれ辛くなるのは目に見えているのになあ、と思っただけですよ」

「仰られている意味が分かりません」

2人が何の話をしているのかイマイチ要領を得られず課長を見上げると、視線を感じたのか課長も私を見てきた。

その目に一瞬、怒りとは違う感情が生まれただけとそれは直ぐに消えて、課長は勝田課長へ視線を戻した。

その様子を見ていた勝田課長は溜息を吐いた。

「まあいいですよ。貴方がどう思っているかなんて私にはどうでも良いことですし。それよりも」

勝田課長は私に視線を投げかけてきた。

「竹原さん、どうされますか？先程の話、私は本気ですよ」

その言葉に私は一瞬呼吸が出来なかった。

「竹原、何があつたんだ」

私を見下ろしてそう問いかけてくる課長の視線を感じたけれど私は課長の視線を受け止めることが出来なくて俯くしかなかった。

「私が、もし嫌だと言ったら…」

「貴方はまず会社に居られなくなりますねえ。先程言ったように貴方が振られた腹いせにセクハラされたと訴えると脅されたと言いま

す。更に取り引も中止しますし。あと、藤原課長もどうなるか…」

「そんな！これは私だけの問題の筈です！」

「もう貴方だけの問題では無いのですよ。藤原課長は知ってしまったのですから。だから言ったのですよ？貴方には関係ない、と」

ねえ、藤原課長？なんて言いながら勝田課長は涼しい顔をしている。私の心に重く絶望がのしかかる。課長が見つ付けてくれた時に一瞬安堵した自分が嫌になった。

課長に迷惑をかける訳にはいかない。力なく体の横に添えていた手をぎゅっと握る。

「勝田課長、分かりました。だからどうか課長を巻き込むのはやめて下さい」

私はゆっくりと勝田課長の元へ一歩踏み出した、のだけど不意に課長の手が私の手を掴んだ。

「竹原、従う必要は無い」

振り返ると、課長は私を安心させるようににっこり笑った。

課長の言っていることが理解出来なかった。

私が従わなかったら課長も私も会社に居られなくなる上に、下手したら会社から訴えられるというのに。

「離して下さい課長。もういいんです。私が勝田課長に従えばそれで」

「半人前がなーに言ってるんだよ。どうせ俺を巻き込みたく無いとか思ってるんだろ？竹原に護ってもらうほど俺は弱くないんだがなあ」

笑みを浮べる課長の口から零れてきた、からかいを含んだ言葉に拍子抜けしてしまった。

課長の顔をまじまじと見ていたら課長はくくつ、と笑って

「勝田課長、そんな脅し、通用する訳が無いじゃないですか」

と、内ポケットに手をやると眼鏡とICレコーダーを取り出した。

ICレコーダーは作動していて、時間をカウントしている。

「あ…っ」

真逆、と思った。課長はこの会話を録音していた？

驚きながら、眼鏡をかける課長を凝視していると、脳裏に課長が眼鏡を内ポケットへ仕舞う動作が浮かぶ。もしかして、あの時に？

「これが何か、もちろんご存知ですよね？」

課長はICレコーダーを顔の近くまで上げて見せ付けるように軽く左右に揺らした。

勝田課長はICレコーダーを見て、それから課長に視線を向けた。課長はにっこりと笑い、内ポケットにICレコーダーを戻す。

「…さて、どうしますか？勝田課長」

勝田課長の表情は眉根を寄せて何かを考えている様に見えた。

不意に訪れる沈黙。様々な弦楽器が奏でる中国を連想させる店内の音楽が耳に流れ込んでくる。

「なんだか興ざめですねえ」

ふっ、と溜息を零すと勝田課長はゆったりと歩き出した。

「私の負けですよ。証拠があつてはどうしようもありませんから」
何時もの様に完璧な笑みを浮べて勝田課長は私と課長の傍を通り過ぎて行った。

つられる様に課長も振り返って

「今後、このデータを使うような事が無いことを祈ってますよ」と、勝田課長の背中へ言葉を投げかけた。

「私は、貴方のその甘さも善人振りも嫌いなんです。ですが、今回はばかりはその甘さに助けられたようですねえ」

そう言いながら、勝田課長は曲がり角へと消えた。

その後、課長と個室へ荷物を取りに戻ると、勝田課長の姿は無かった。

あんな事があつた後だから暫くは顔も見たくなかったのでほっとした。

コートを着込んで帰り支度を済ませて外に出ると、飲み終わってこれから場所を移すのであるうスーツ姿の人々が点々と歩いていたり、時折吹き付ける風が、頬やストッキングに包まれた足を撫でて体温

を奪っていく。

「うう、寒いですね、課長」

そう言って笑おうとしたのだけど、顔が強ばってうまく笑えなかった。

課長は何かを考え込んでいるようで、私の問いかけには全く気づいていなかった。

「…勝田課長の事考えているんですか？」

私がそう問うと、課長は私に視線を向けた。

「実は、大事な部分の音声データは録音されてないんだよ」

流れ始める。 7 (後書き)

答え：興ざめですねえ

着地点をそこにしか持って行けなかった自分に興ざめだあああああ！
そして、オジサンの相手は正直しんどいのですよね！

流れ始める。8 (前書き)

明けましておめでとございます。

2011年中に上げたかったのですが間に合わずorz

流れ始める。 8

「何言ってるんですか課長。ちゃんと動いているの私見ましたよ？」
課長の勘違いかと思つてそう言つてみるのだけど、課長は気まずそうな表情で笑い

「自分も、眼鏡をポケットにしまった時に録音ボタンを押したと思つていたんだが、動揺してしまつて上手く押せていなかったんだ。だから取り出した時に動作して無くて、こつそり録音ボタンを押して、ずっと録音していた風を装つたんだ」と言つてICレコーダーをスーツのポケットから取り出すと立ち止まつた。

「聞いてみるといい」

そう言つて課長は再生ボタンを押す。

『あつ』数秒の間の後聞こえてきた第一声は間の抜けた私の声。

『これが何か、もちろんご存知ですよね？』続いて課長の声が出て、また少し間が空いてマイクと何か布が擦れる音が聞こえてきて直ぐに課長は再生を止めた。

録音時間は16秒32で止まつていた。

確かに録音の経過時間が動いているのは確認したけれど、その録音時間がどれ位経過しているかなんて全く気にしていなかった。

しかも、私が見た時は多分開始数秒程度だったにも関わらず気づかなかつたなんて。

課長の自信たつぷりな雰囲気と動作にすっかり騙されてしまった。私が呆気にとられて言葉を発せずにいると、課長は申し訳なさそうな顔をして

「危ない橋を渡らせてしまつて済まなかつたな」なんて言うから私は慌てて

「いいえ、とんでも無いです！課長がいなかったら私今頃どうなつていたか…。私の方こそ課長を変な事に巻き込んでしまつて申し訳

ありませんでした」と言つて頭を下げた。

「そんなの気にする必要はない。部下が困っていたら助けるのが上司だろう？だから、顔を上げる竹原」

顔を上げると、課長と目が合った。

「ですが」

「こつこつ時は謝られるより礼を言われた方が嬉しいんだがなあ」私の言葉を遮るように言いながら、課長はなんでもない、と言う様に優しく微笑んでくれる。

それを見てようやく私は顔の緊張が解けたのを感じた。それと同時にじわり、と湿気を帯びて熱を持つ目頭。

ああ、まずい。そう思つて咄嗟に課長に背を向けてしまう。唇をかみ締めて堪えてみても、じわじわと目の縁に涙が溜まっていく。

こんなに頻繁に泣くのは社会人としてどうかと思うけれど、一度解けた感情はなかなか元に戻つてはくれない。

鞆の中からハンカチを取り出して目元に当てて拭っていると、不意に甘い匂いが漂つて。

課長の腕が後ろから伸びてきて私の体を　　そう気づいた時には

私は課長に抱きしめられていた。

突然の事に驚いて硬直してしまふ。課長の腕は優しく私の体を包み込んでいて。

コートの手地越しに触れる課長の体が妙に現実味を帯びていた。

「か…課長…？」

どうにか発することの出来た声は、変に裏返つてしまふ。

「す、すまん」

それと同時に課長の腕が私を解放した。

微かに漂う甘いシトラスが私の思考をかき乱す。思考を働かせようとするのだけど、何も考えられない。

「すまなかつた。ウチの妹が泣いている時に抱きしめてやったら落ち着いたからつい癖で、な」

申し訳なさそうな課長の声が聞こえるのだけど、混乱した私の頭は

どう返したら良いのか分からなくて言葉を発せずにいると「これじゃあ勝田課長と変わらないなあ」と課長は続けた。その声には自嘲の色が含まれていて。

「そんな事ありません！課長は勝田課長と同じじゃないです！」
思わず私が勢いよく振り返ると課長は驚いた顔で私を見つめた。
勘違いして欲しくなかった。あんな人間と課長は一緒じゃない。

「課長は…あんな、他人の事を顧みない人じゃありません。一緒にしちゃ駄目です！今だって、私の事を気遣って直ぐに離れてくれたじゃないですか！それに勝田課長に掴まれた時はただ気持ち悪かったけど、課長が抱きしめてくれた時は嫌じゃ」
「
自分が何を言おうとしているのか気づいて、私は言葉を続けることが出来なかった。

課長の視線に恥ずかしくなって顔を俯げる。

ちよつとまつて、今、何を言おうとした？課長に抱きしめられて、嫌、じゃなかった？

一気に顔が熱くなる。

「まあそう言つて貰えると助かる。また…気を使わせてしまっているな」

「気なんて、使っていません…」

どうして課長の時は平気だったんだろう。自分でも訳が分からなくなってくる。

今までもそうだ。勝田課長より課長に触れられる回数の方が多かったのに。

「勝田課長は…、会う度に不快な事も言われてましたし…課長はそういうこと、しないですし。それに」

「ちよつとまつて」、言葉を遮られて私は顔を上げて課長を見ると、少し険しい表情になっている。

眉間には薄っすらとオフィスで何時も見る1本の縦皺が浮き上がっていた。

私に今分かることは課長が不機嫌だということだけ。自分の発言を

思い返してみても思い当たることは何も無い。

「竹原、今まで勝田課長に何かされたのか？」

「何もされていません。…今回の様な事は初めてです」

「じゃあ不快な事って何を言われたんだ？」

「服装とか、体型について、色々…です」

そう言い終えない内に課長は溜息を零した。

「竹原、なんで相談しなかったんだ」

険しい表情を崩さずにそう言う課長の視線に耐えられず顔を俯けてしまう。

「申し訳ありません。嫌なことを言われている、とは思っていたのですが、それが相談する程の事なのか判断しかねてしまって…」
そう言うのもやっとで下唇をかみ締める。

「別に攻めている訳じゃないんだ」課長の声が柔らかくなった。

「今日の状態から大方想像できるが微妙な言い回しをしてきそうだしな、あの人。ただ、竹原が不快だと感じていることを相談してくれていたら他の人間と一緒に同行させる事も出来たし、担当を替える事も出来たんだ。俺はそんなに信用出来ないか？」

そこで漸く私は、課長が何に対して怒ったのか気づいた。

課長は私が相談しなかった事で、信用されていないと感じたんだ。

「…申し訳、ありませんでした」

課長を尊敬しているのに、相談するのが恐かった。

信じてもらえないかもしれない、私が不快に思っているだけでそれ自体は大した事じゃない、と否定されるかもしれないと考えると見えなかった。結局は、それも信用していないという事なんだ。

鼻の奥がジン、と痛くなる。視界が再び水気を帯び始める。

すると、課長の腕が私へと伸びてきた。

ぽん、ぽん、と優しく頭を撫でる大きな手の感触。

「何かあつてからじゃ遅いんだから、次からは何かあつたら直ぐに相談してくれ」

な？と言いながら課長はずっと私の頭をゆっくりと撫で続けてくれ

る。

その優しさが今はただただ胸に染みる。

「課長…、なんでそんなに優しいんですか」

声を震わせない様にそう言えば、課長はふ、と吐息混じりに笑い

「上司だからな」と言った。

その言葉はそっけない一言だったけれど、涙腺の決壊を後押しするの
に十分だった。

止め処なく溢れてくる涙をハンカチで押さえても押さえても、次々に溢れ出てきて。

その間も課長は何も言わず、私の頭を撫で続けてくれた。

課長に触れられるのは嫌いじゃない。寧ろ心地よくて安心する。

それが何を意味するのか少しだけ確信めいたものが浮かんだけれど、それは戸惑いと共に心の奥へ押しやった。

流れ始める。 8 (後書き)

取り敢えず流れ始める。は一段落です。

緩やかに。 1

いつも通りのいつもの朝の光景。いつもの様に電車内は沢山の人でぎゅうぎゅう詰めだった。

それに加えて、暖房も効いている為少し空気が重苦しく感じる。欠伸を噛み殺しながら、昨日の事を考えた。

課長と一緒にタクシーに乗ってアパートまで帰ってきた所までは平気だったのに。思わず溜息が漏れる。

部屋に戻って一人になると課長に抱きしめられた事を思い出して一人で悶々としてしまい、朝方4時頃によくやく眠れたのだった。

どうにか何時もの時間に起きることは出来たけれど、頭はまだぼんやりとしたままだった。

不意に昨日の出来事が脳裏に浮かぶ。思い出さないようにしているのだけど、気を抜くと直ぐに浮かんでは消えていく。

課長の腕の中、コート越しに伝わる課長の体。そして優しく頭を撫でてくれる手。

しかも、ほんの少しの間密着していただけなのに、私のコートから時折仄かに課長の甘い香水の匂いが立ち昇って余計に意識してしまふ。

課長は妹さんにするように私を慰める為の行為で抱きしめてくれただけ。

そこに他意など何も無いことは分かっているのに、私は課長に抱きしめられたことを頭から払拭することが出来なかった。

車内アナウンスが私の降りる駅の名前を告げる。緩やかに止まった電車を降りて、駅の構内を人の流れに任せて歩いていると大きな欠伸が出てくる。

今日はゼリーの他に栄養ドリンクも買って行かないと拙そうだ。

今日も課長は窓際の席に座って眉間に皺を寄せている。眼鏡の奥の瞳は、画面を睨みつけていた。何時も通りの課長の姿だった。

挨拶をしないと。自分の席へと向かいながらそう考えるのだけど、どうやって言っていたか、声を発していたかが思い出せなくなって焦ってしまう。

「おはようございます」

ようやく発した声は何時もより少し硬い気がした。

「おう、おはよう」

パソコンから視線を上げずに声だけで課長は挨拶を返してくる。

「おはよう」

「わっ」

不意にかけられた声に驚くと、向かいの席から私を見上げる徳永の視線にぶつかった。

「なんだ、変な声だして」

課長に気を取られて徳永が居ることに気づいていなかった。

怪訝そうに私を見る徳永に「なんでもない」と言っ慌てて椅子へと腰を下ろした。

それでも徳永は私を見ているので、その視線から逃げるように体を屈ませて鞆を足元へ置く。

元の体勢に戻る時ちらりと横目で課長の様子を伺ってみるけれど、課長は相変わらずパソコンと睨めっこしていて私達のやり取りなど気にも留めていない様で少しホッとした。今こちらに意識を向けられると確実に緊張してしまう。このまま今日は課長と関わりを持たずに過ごしたい。

「…昨日なんかあったのか」

「へっ？」

声を潜めて聞いてくる徳永の問いかけに間の抜けた声を漏らしてしまふ。

「何が？」

私も声を潜めて問いかけに応える。

「何がじゃなくて。昨日勝田課長の接待だっただろ」

どうやら徳永は様子が変な私を見て勝田課長と何かあったと思った

みたいだった。

「ああ、勝田課長…」

「勝田課長以外に何があるんだよ」

課長の事ですっかり忘れていました。しかもそれを意識してしまっ
て一人悶々としているんです。なんて言える訳も無く。

パソコンを立ち上げながら溜息を零すと、徳永はそれを勝田課長と
結びつけたようで

「セクハラされたのか」と聞いてくる。

「まあ…、色々あったと言いますか…」

思わず苦笑いを浮かべた煮え切らない私の言葉に徳永は訝しげな表
情を浮かべている。

「ちょっとここでは言い辛いから、お昼時間に話すよ」

ちらほらと人が増えてきているので、流石に昨日勝田課長と何があ
ったのかここで言う訳にはいかなかった。

徳永は周りに視線を巡らせてから納得したように頷いて「分かった」
と了承してくれた。

例えば、最後に誰かに抱きしめられたのは何時だっただろう。大
学3回生の夏にその当時の彼氏と別れて以降、就職活動だ卒論だで
忙しくなってそのまま就職。

就職してからも、仕事をこなすのに必死で恋愛沙汰からは遠く離れ
てしまった。

だから慰め以外の意味など何もない抱擁に動揺してしまうのかも知
れない。

キーボードを打ちながらそんな事を考えて、小さな溜息を零した。

お昼時間、私と徳永は会社の近くの定食屋さんへと向かった。何
時かは割りと混むお店なのだけど、今日はそこまで人が入っていな
かった。

更に運良く一番奥の窓際の席に座る事が出来た。

「もうホント大変だったんだよ、昨日」

私は徳永に昨日の勝田課長とのやり取りや、課長に助けってもらった

事を説明する。

話が終わる頃には徳永の前に秋刀魚定食、私の前に親子丼が置かれていた。

「凄いな課長。そんな状態だったら絶対顔に出る自信があるわ」
そう言つて徳永はご飯を頬張った。

「すっかり騙されたよ課長に。平然とICレコーダーの液晶画面を見せてくるし」

私もご飯ととろとろの半熟卵が掛かった鶏肉を口へと運ぶ。とろとろの卵の食感と鶏肉の歯ごたえ、甘辛いタレの味を噛み締めていると
「ははっ、それは幾ら何でも気づくもんだろ」

と徳永に苦笑されてしまった。

「あの状況で録音機器見せられたら、普通録音されているものだと思うものじゃない？」

そう言つと、徳永は涼しげな顔をして味噌汁を啜り

「勝田課長は少し距離があったからまだ分かるけど、課長の近くにおいて気付かないとか竹原眼鏡買った方がいいんじゃないの？」なんて言つて秋刀魚に箸を伸ばした。

「その状況にいなかった人には分からないでしょ。あの状況下なら絶対徳永も騙されてるよ」

私が抗議するように言えば、徳永は口角を上げて

「分かるよ。竹原みたいに迂闊な人間じゃないしな」と言われてしまった。

確かに迂闊かもしれないけれど、今回は特別だと思つのに。

不貞腐れながら親子丼を口へと運ぶ。ちらりと徳永を見れば、目が合った。

「まあでも良かったな。これでもう変なちょっかいはかけられないだろうし。これでも一応心配していたんだぞ」

人のことを散々言つておいて急に優しいことを言われても素直に言葉返せる訳もなく。

「はいはい、迂闊な人間ですもんね、心配ですよね」なんて返せば、

徳永は私が不貞腐れているのを察知したらしく

「ごめんって。竹原の反応を見ているとつい、からかいたくなるんだよ」と謝ってくる。

「分かったよ。だけど謝る気があるなら、ココ、徳永が奢ってくれよよね？」

私がつこり笑うと、徳永は私を暫く見つめて溜息を吐くと「いいよ」と言った。

「ホントに？」驚いて思わずそう問い返すのだけど、徳永は「言いだしっぺが驚くなよ。今日は奢ってやる」と笑った。

言うだけ言ってみるものだ。浮かれ気分で親子丼を頬張る。奢りとなると味自体もまた特別に感じられた。

緩やかに。 1 (後書き)

実はサブタイトルはそこまで意味がなかったりします。

というよりも、元々サブタイトルなんて付けてなかったんです。

最初に投稿する時に何を思ったか数字にすれば良かったのに、言葉を書いてしまいorz

今回のサブタイトルは考えるのに苦労しました。

緩やかに。 2

奢ってもらいホクホクとした気分でおフィスに戻ると私を待ち受けていたのは課長が私を呼ぶ声だった。

「竹原あ！ちよつと来い」

思わず肩がびくりと震える。課長を見れば眉間の間に1本皺が刻まれていて、不機嫌な空気を醸し出していた。その様子から何か良くない知らせを感じた。

「はい、今行きます」

ここ数日は呼び出しも無く、順調だったのに。何時も以上に緊張してしまう。

足早に課長の席へ向かうと、課長は鋭い目付きでパソコン画面を覗んでいた。

「これ、見てみる」

着いて早々課長にパソコンのディスプレイを見せられる。朝から打ち込んでいた取引先に関するデータが表示されていたけれど、何処もおかしい所は無い。課長は何を言いたいのだろう。

私が困惑していると課長はその困惑を感じ取ったのか溜息を零した。「あのな、この取引先の資料、変更されていると社内メールで連絡したはずなんだが、目を通していないのか？」

「…あ」

パソコンを立ち上げるとまっ先にメーカーがポップアップで表示されるようになっていた。

今朝、確かにメールが来ていた。だけど、目を通しただけで内容が頭に入っていないかった。

「申し訳ありません、直ぐに直します」

「あと、こつちのデータも。数値入力が入らずずれている」

課長がマウスを操作すると、別窓で既に開かれていた他のデータ入力画面が出てきた。

これも今日入力していたデータだった。酷い仕事をしている。

こんなの入社1ヶ月のどが付く新人でもしないミスだ。

体温が一気に引いていく。私が画面を凝視していると、横からまた課長の溜息が聞こえた。

「どうしたらこんな事になるんだ」

課長は腕を組むと椅子の背もたれに体を預けて私を見上げる。眼鏡の奥から発せられる視線が今はただ痛かった。

「竹原」

声を潜めて私の名前を呼ぶ課長に視線を向ける。

「昨日の事、引きずるのは分かるが仮にも一端の社会人なんだ。動揺する気持ちは分からないでもない。ただ仕事は仕事だ。きっちりやってくれ」

その声は冷静だけれど呆れの色が浮かんでいて。昨日の事が勝田課長を指しているのは分かる。

けれど暗に、子供じゃないんだから抱き締められた事位で動揺するな。そう言われているように感じて恥ずかしかった。

「申し訳ありませんでした」

私が頭を下げると、本日3度目の課長の溜息が聞こえた。

「もういい、へこむのは後にして今は目の前にあるやらなければいけない事にちゃんと集中しろ」

そう言つて課長はパソコンのディスプレイを元の位置に戻すと、視線を画面へと移してキーボードを打ち始めた。

私は一礼すると、重い足取りで自分のデスクへと戻った。

椅子に座つて溜息を吐くと

「なんだ、何かやらかしたのか」と、向かいの席の徳永が顔を覗かせて尋ねてくる。

「今日の午前中の仕事、全部間違えてた」

少し口端を上げて笑みを浮かべると私は直ぐにデータの呼び出しを行った。

「これまた酷い失態を犯したなあ」

呆れながらそう言われる。

「…なんだよねえ」

何時もはここで適当に言い返すのだけど、そんな気力もなく、ふー、と深い深い溜息を吐く私の空気を察したのか徳永は

「あー…竹原、落ち込み過ぎ。修正効くんたる？課長のあの様子だと。だからそんなへこむ事ないって」と言ってくれた。

徳永の優しい言葉。それすらも今は自分の間抜けさを強調されているような気がして。

「…うん、有難う」

それだけ返事をするとは私はデータの修正に取り掛かった。

午前の入力分の修正を終えて午後の残りの分も終える頃には空が夜の色に染まっていた。

何時もの電車の時間より少し遅かったからか空いている訳では無いけれど、それなりに余裕があった。

つり革に掴まりながらぼんやりと車窓から流れる景色を眺める。今までへマをやらかした事は数えきれない程あるけれど、あんなに酷いへマは初めてだった。

朝、変に悶々と考えてしまっていた自分がとてつもなく恥ずかしい人間に思えてしまう。

課長を変に意識して、その事ばかり考えて。

それに比べて課長は何時もの課長で。その差が余計に自分自身を恥ずかしい人間だと感じさせた。

課長のせいで動揺しているんです。と言っしまいましたけど、そんなの子供じみている。

それを言った所で何になるのだろう。それに課長の事だから、それを物凄く気に病んでしまうのは目に見えていた。

課長を責めたい訳じゃない。自分の失敗を課長のせいにしてしまう様で嫌だった。

それとは関係なく、自分の油断していた気持ちの問題なのだから。

ふと大学時代の先輩を思い出した。同じサークルで、同じ中学出

身ということもあってか物凄く仲良くしてくれた。

私は勘違いしてその人の優しさを愛情と捉えてしまった。皆にも優しい人だったけれど、私には親しみを感じる優しさで接してくれていたから。

だけど、薄っすらと感じてもいた。この優しさは特別な人に対する感情ではないと。

それでも私は僅かな可能性に賭けて思い切って告白した。結果はやっぱり振られてしまった。

先輩には1年の時から付き合っている彼女がいて、私はあくまで可愛い後輩、というポジションだった。

告白したら彼女と別れて私と付き合ってくれるかも知れない。そんな考えが頭の片隅にあっただけに、余計に惨めだった。

今となつては、先輩に振られて良かったと思う。

彼女と別れて私と付き合ってくれても、私には先輩をその彼女と居る時と同じ位幸せに出来たとは思えないから。

彼女と別れてくれるかも、なんて考える人間が人を幸せに出来る訳がない。

人の不幸の上に自分の幸せを築いてはいけない。

まあ、今だからそう思える話ではあるのだけど。思わず苦笑いをしてしまう。

だから。だから、課長の優しさを勘違いしちゃいけないんだ。

あの時の状況と今の心情を重ねて、自分を戒める。

私は、課長の事を上司として尊敬している。ただ、それだけ。それだけなんだ。

窓ガラスに映る自分の目を見つめて、私は心でそう呟いた。

緩やかに。 2 (後書き)

今回は竹原の心理描写がちよいと多めです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4090y/>

些細な事。

2012年1月14日11時46分発行